女子大学生の内的作業モデルと家族表象

――家族描画と円環母子関係イメージ画を指標として――[1]

宮本邦雄・佐藤かおり[2]・北本桜香[2]

Bowlby（1976;1977;1981）によって提唱された愛着理論は、乳児期の愛着対象（Attachment Figure：以下AF）との行動及び相互作用レベルの研究から、近年は表象レベルの研究へとその焦点を移してきている。すなわち、愛着に関する内的作業モデル（Internal Working Model：以下IWM）の概念によって、乳幼児期の愛着関係のみならず、青年期、成人期、老年期の生涯発達における愛着関係の検討が行われている（Kobak & Aceery,1988; Bretherton,1995）。

IWMとは、乳幼児期をこえて児童期以降にも持続していく、自己及び他者に関する表象であり、人はこの表象を用いて外界からの刺激を選択的に取り入れ、解釈し、行動のプランを立てる（Bowlby,1977; 1981;Main, Kaplan,& Cassidy,1985）。IWMは、乳幼児期におけるAFとの愛着関係の中で内在化されていくが、乳幼児の愛着パターンに対応する4つのパターンが考えられている。すなわち、他者－自己に関して安定したモデルをもっている安定型、他者と親しくなることを回避する回避型、不安定でアンビバレントな表象をもつアンビバレント型の3タイプに、不安定でいずれのタイプにも分類できない無秩序型が加えられ、児童や青年を対象に種々の側面から検討が行われてきた。近年の認知科学研究の展開に伴い、人間の情報処理機構に対するシステム論的アプローチがとられるようになったが、IWMについても、対人情報の処理機構としてのシステムの解明が求められている。

佐藤（1998）は、長期記憶内に貯蔵されたモデルを表象モデルと呼び、非言語的・感覚的レベルの表象システムと言語概念レベルの表象システムに区別した。前者は状況手掛かりによって自動的に活性化されるのに対し、後者は言語によるアクセスが可能であるとしている。内的作業モデルの内容と体制化の個人差は、個人が受けた対人関係の情緒的コミュニケーションの歴史に由来するという。愛着方略としては、安定型は愛着システムと探索システムのバランスがとれている1次方略をとるのに対し、回避型は愛着システムを不活性化する2次的方略を、またアンビバレント型は愛着システムを過活性化する2次的方略をとるとしている。すなわち、内的・外的脅威の存在する事態で、回避型は不快刺激手掛かりを無視し、愛着対象の必要性をなくそうとする。このタイプでは、感情レベルのシステムと言語レベルのシステムの分離が生じているとみられる。一方、アンビバレント型は不快刺激手掛かりに過敏に反応し、愛着対象のケアを強く求めようとする。

幼児期から児童期・青年期へと進むに伴い、行動レベルの愛着システムから表象レベルのシステムへと変化していくと考えられる。ここで家族が基本的な愛着対象の形成される場であり、愛着ネットワークが拡大されていく基盤であることは疑いのない事実である。ま

たIWMが安定的に形成され維持されていく原因として家族システムの安定性が大きな要因として指摘されてきた（Feeney & Noller ,1996）。それ故、各個人のIWMに基づく対人処理様式を検討するために、家族に関連した刺激対象を用いることは妥当であると考えられる。

そこで宮本（1999）は、女子大学生を対象に質問紙法を用いてIWMを測定し（詫摩・戸田,1988）、愛着に関連が深い家族関連語（おとうさん、赤ちゃん等）に対する連想反応を手がかりとして、IWMに関連する対人的情報処理様式を検討した。その結果、IWMの安定、回避、アンビバレント特性と家族関連語に対する連想反応とには、回避傾向と連想反応数に正の有意な相関が認められた（宮本,1998）。回避傾向者は、家族関連語の情報処理に対して情動的側面を抑制し、連想反応が促進されるのではないかと解釈された。しかし、自由連想法検査の手続きにより連想反応を求めたところ、回避、アンビバレント特性との強い関連は確認できなかった（宮本,1999）。すなわち、家族関連語に対する連想反応には、Main（1990）による愛着の二次的方略（抑圧方略と過活性方略）と回避型・アンビバレント型との明確な対応が見られなかった。佐藤（1998）が述べているように、連想反応が言語概念レベルの表象システムへのアクセスを必要とし、意図的な処理が行われ、それによってIWMスタイル間の相違が明確に表れなかったとも考えられる。

愛着スタイルの乳児期における行動レベルの研究から、IWMの表象レベルの発達的研究へと焦点が移るにつれて、その測定法の妥当性も検討されてきた。幼児期後期においては、ドール・プレイや物語作成が愛着の指標として用いられてきたが（Cassidy,1988）、児童期に入ると遊びの質も変化し、こうした指標の生態学的妥当性が疑問視されている。また言語報告の能力も問題とされることから、Fury,Carlson,& Sroufe（1997）は、児童期前期の子どもを対象とした愛着の指標として家族描画を取り上げ、12、18ヶ月でのストレンジ・シチュエーション法（Strange Situation Procedure：以下SSP、Ainsworth,M.D.S.,Blehar,M.C.,Waters,E.,& Wall,S.,1978）による愛着スタイルとの関連を検討している。彼らはまず、Kaplan & Main（1986）の基準に基づき、IWM愛着スタイルに対応するサインのチェックリストを用いて分析した。例えば、回避型のサインとして、個別化されていないこと・母子間距離が長いことなど、抵抗型（アンビバレント型）として、人物像が込み合っていること・障壁の存在などの特徴を用いた。さらに、全体的評定7尺度（活力、幸福、傷つきやすさ、分離、緊張、役割逆転、奇妙さ、全体的病理）を用いている。その結果、12、18ヶ月時のSSPと児童期の家族描画による分類には高い一致が認められた。また、全体評定値とも正の相関（.20～.30）が認められ、愛着スタイルの判定に家族描画が有効であることが示された。

心理臨床家が家族描画法を用いる場合、その目的は「クライエントの家族に関連した情報」を非言語的に得ることであり、①家族成員全体の力動的関係をできるだけ客観的に把握しようとする時と、②クライエント個人が主観的に認知している家族布置を捉えようとする時がある（高橋、1987）。家族画からは家族布置について3つの水準の情報を得ることができるという。第1水準の情報は、パーソナリティの上層にあってクライエント自身が言葉で表出でき、明確に意識している家族布置の情報、第2水準の情報は、漠然と感じているが、言葉で明確に表現できない情報、第3水準は、クライエントが全く意識していない情報である。

家族関係のイメージ的側面を表現する家族描画法においては、非言語的感覚的なレベルの表象システムを自動的に活性化する情報処理様式が働くのではないだろうか。とすると、家族描画法には、IWMスタイルに対応した対人情報処理が反映されると考えられる。

さらに、母子関係に焦点を当てた描画法として円環母子関係イメージ画（以下円環イメージ画）がある。これは、幼児期の自分にとって母親がどのような存在であったかをイメージし、母親と自分を各々の円で表すものである（松尾・小川,1998)。こうして母と子に見立てて描かれた２つのイメージ円によって、母子関係のイメージをとらえようとする投影法である。描画に表された関係は質問紙法による母親の養育態度の結果とほぼ一致しており、その妥当性が確認された。さらに、発達的変化や共感性との関連も検討されており、共感性の高い者は幼い頃母親に包まれていたイメージを持つことが認められ、良好な母子関係が対人関係の適応に促進的に働くことが示唆された。この方法は、母子関係について非言語的なイメージを把握するには適切な方法であると考えられる（松尾・小川,1998；松尾・小川,1999)。

そこで本研究では女子大学生を対象に、第一に家族描画を指標として、愛着に関するIWMと家族関係イメージとの関連を検討する。第二に松尾・小川（1998）による円環イメージ画法を用いて、幼い頃と現在の母子関係のイメージとIWMの関連を検討する。家族描画については、①安定愛着傾向の者はポジティブな家族像を描き、不安定愛着傾向の者はネガティブなものを描くだろう、②不安定－回避傾向の者は形式的図式的な家族像を描き、不安定－アンビバレント傾向の者はバランスの崩れた絵を描くであろう。また、円環イメージ画においては、①安定愛着傾向の者は、幼い頃には内包・内接が多く、不安定愛着傾向の者は分離が多いであろう、②不安定－回避傾向の者は両時期とも分離が多く、不安定－アンビバレント傾向の者は現在でも内包・内接が多いであろう。

以上の仮説を検討することによって、IWMスタイルに特有と考えられる対人情報処理、特に家族表象について考察することを目的とする。

方　法

被調査者：岐阜県のＴ女子大学学生、１年次学生140名が調査対象となった。IWM調査(99名)、家族描画調査（121名)、円環イメージ画調査（135名）は時期を別にして行われ、各調査の資料を個別に分析した後、IWMと家族描画に参加した93名、IWMと円環イメージ画に参加した93名の資料について関連性を分析した。

手続き：１）家族描画：①Ａ４の白紙とHBの鉛筆を与え、「私の家族という題で絵を描いて下さい」という教示によって描画を求めた。②描いた人物の順に番号の記入を求め、家族構成を尋ねた。③感想や絵の説明がある場合はその裏に記述を求めた。④IWMの調査との対応をとるため、学籍番号と氏名の記入を求めた。２）IWM質問紙：詫摩・戸田(1988）によって構成された18項目の質問紙を用いて６件法による評定を求めた。２)円環母子関係イメージ画（松尾・小川,1998）：①Ａ４の白紙とHBの鉛筆を与え、「幼いときの（現在の）自分と母親との関係を円で表して下さい」という教示によって２種の描画を求めた。②どちらの円が母親あるいは自分を示すかを明記し、③さらにイメージ画についてのコメントがある場合は書き添えるよう教示した。

調査時期と実施方法：家族描画調査は2000年７月、IWM質問紙調査は2000年10月、円環母子イメージ画は2001年１月に心理学の講義中に集団で実施した。

分析方法：IWM質問項目の因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、各愛着因子毎に合計得点を算出した。その後、各因子得点（＝各因子合計得点－（他の２因子合計得点の合計／２)、山岸,1997）を算出し、安定型、回避型、アンビバレント型の愛着スタイルの分類を行った。家族描画については、３名の評定者による、①形式分析（描画特徴10項目、描画様式10項目)、②SD法印象評定(形容詞対15項目で７件法)、③家族雰囲気評

定（親子、夫婦、きょうだい、全体で５件法)、④全体評価（３件法）に基づき基礎データを求めた。その後、IWMスタイルの群間比較とIWM各因子得点との相関分析を行った。円環母子関係イメージ画については、小川・松尾（1998）を参考にして、二つの円について以下の４点から分類した。①円の関係について、内包（一方の円形方の円に含まれているもの)、内接（一方の円が他方の内側にあり、かつ接しているもの)、交錯（二つの円が交わっているもの)、外接（二つの円が外側から接しているもの)、分離（二つの円が離れているもの)、その他の６カテゴリー。②円の位置について、子の円が母の円のどの方向に位置するかによって中央、上、横、斜下、下、その他の６カテゴリー。③円の大きさについて、母親＞自分、母親＝自分、母親＜自分の３カテゴリー。④コメントについて、ポジティブ、ニュートラル、ネガティブ、無し、詳細記述の５カテゴリー。その後、各測度についてIWMスタイルによる群間比較を行った。

結　果

１．IWMスタイルの分類

まずIWM尺度の18項目について主因子法（バリマックス回転）による因子分析を行った結果から、安定、回避、アンビバレント各因子を確認し合計得点を算出した。さらに、山岸（1997）に基づき求めた各因子得点が正となる因子とその組み合わせによって以下の愛着スタイルに分類した（表１)。その結果、安定型（SEC）４名、回避型(AVO）０名、アンビバレント型(AMB)26名、安定と回避との混合型（SAV）０名、回避とアンビバレント の混合型（AA）28名、安定とアンビバレントの混合型（SAM）27名、全てが正の全混合型（SAA）８名となった（第１分類)。また、最高得点が他因子の正得点の２倍以上であることを基準に分類してみると、安定型（SEC）８名、回避型（AVO）０名、アンビバレント型（AMB）60名、回避とアンビバレント の混合型（AA）15名、安定と アンビバレントの混合型（SAM）10名、その他28名であった（第２分類)。家族描画の各側面について群間比較を行うための大分類として第１分類に基づき安定因子が正の安定型（S）と負の不安定型（NS）とに分類すると、S群が39名NS群が54名となった。

２．IWMと家族描画の特徴

まず全体として、描画の形式分析を行ったところ（表２)、顔のみ画が約半数を占め(52.1%)、記念写真型が25.6%、何らかの動

表１　各因子得点に基づく IWM スタイルの分類

愛着スタイル	secure	avoidant	ambivalent	第１分類	%	第２分類	%	大分類
安 定 型	○	×	×	4	4.3	8	8.6	S
回 避 型	×	○	×	0	0	0	0	NS
アンビバレント型	×	×	○	26	28	60	64.5	NS
安定･回避型	○	○	×	0	0	0	0	S
回避･アンビバレント型	×	○	○	28	30.1	15	16.1	NS
安定･アンビバレント型	○	×	○	27	29	10	10.8	S
全混合型	○	○	○	8	8.6	他(28)	他(30.1)	S

各因子得点＝各因子尺度得点の合計－(他の２因子尺度得点の合計／２)
第１分類：各因子得点が正○である基準から分類する
第２分類：いずれかが○で他の○の２倍以上あるものを SEC、AVO、AMB に入れる
第１分類に基づく大分類Ｓ：39名、NS：54名
第２分類に基づく大分類Ｓ：18名、NS：75名

作を伴う描画が16.5%、家系図型が9.9%に認められた。さらに表3に示すように、描画様式を見てみると、大半が、写実型で（79.5%）、全体を描き（77.8%）、中程度の大きさで（65.8%）、中性的な表情であった（70.5%）。一方、不完全人物（13.7%）や障壁有（4.3%）、異常なサイン（1.7%）は、比較的少なかった。

次に、描画形式の出現頻度について、χ2検定によってIWMのS群とNS群の群間比較を行った（表4）。その結果、顔のみ画、全体画、記念写真型、動作型、家系図型、シンボル画、背中画、本人不在、顔無し画、人物部分の各特徴のうち2つに群間の有意差が認められた。顔のみの描画ではNS群の方が多く（$\chi^2=4.94, df=1, p<.05$）、動作型画ではS群の方が多い（$\chi^2=4.43, df=1, p<.05$）。

さらに、描き方の特徴について同様に群間比較を行った（表5）。記号的か写実的か、全体か部分か、本人の腕の位置（下方に有るか否か）、母子間の距離、人物像の大きさ（大中小）、不完全人物の有無、異常なサインの有無、本人の表情（正中負）、障壁の有無、性差の有無という特徴の中で、人物像の大きさのみに有意差が認められ（$\chi^2=6.85, df=2, p<.05$）、S群の方が大きい像が多く、中程度の像が少なかった。

3．IWMと家族画の印象評定

SD法で用いた15対の形容詞に対する3名の平均評定値について主因子法（バリマックス回転）による因子分析を行った結果、単因

表2　家族描画の形式分析

描画の特徴	人数	%
顔のみ画	63	52.1
全体画	39	32.3
記念写真型	31	25.6
動作型	20	16.5
家系図型	12	9.9
背中描画	6	5.0
描画者不在	15	12.4
人物部分	2	1.7

表4　家族描画の形式分析

描画の特徴	S (39)	NS(54)	χ2検定
顔のみ画	14(35.9)	32(59.3)	4.49(p<.05)
全体画	17(43.6)	16(29.6)	ns
記念写真型	13(33.3)	12(22.2)	ns
動作型	11(28.2)	6(11.1)	4.43(p<.05)
家系図型	3(7.7)	3(5.6)	ns
シンボル型	4(4.4)	5(9.3)	ns
背中描画	4(4.4)	2(3.7)	ns
描画者不在	8(20.5)	16(29.6)	ns
顔無し画	5(12.8)	6(11.1)	ns
人物部分	1(2.6)	11(20.4)	ns

表3　家族描画の描画様式の特徴とその頻度(%)

記号型	24(20.5)	写実型	93(79.5)			
全体	91(77.8)	部分	19(16.2)	その他	7(6.0)	
腕の位置	下方	19(54.3)	その他	16(45.7)		
大きさ	大	22(18.8)	中	77(65.8)	小	18(15.4)
不完全人物	有	16(13.7)	無	101(86.3)		
異常なサイン	有	2(1.7)	無	115(98.3)		
表情	正	28(29.5)	中性	67(70.5)	負	0(0)
障壁の有無	有	5(4.3)	無	112(95.7)		
性差	有	101(88.0)	無	14(12.5)		

表５　家族描画様式によるＩWM安定群と不安定群の比較

描画様式	S	NS	描画様式	S	NS	描画様式	S	NS	χ２検定
記号型	9	10	写実型	30	42				ns
全体	32	40	部分	5	10	その他	2	2	ns
腕下方	6	11	その他	8	4	欠	25	39	2.77(p<.10)
人物大	12	5	中	21	39	小	6	8	6.85(p<.05)
不完全人物有	34	45	無	5	7				ns
異常なサイン有	2	0	無	37	52				ns
表情正	9	11	中性	24	29	負	6	14	ns
障壁有	0	3	無	39	49				ns
性差有	35	45	無	4	7				ns

表６　家族描画様式印象評定値とＩWM各天度得点の相関

IWM	SD合計	親子関係	夫婦関係	きょうだい関係	全体的雰囲気
secure	0.13	0.12	0.04	0.02	0.03
avoidant	0.21＊	0.20＊	0.14	0.22＊	0.23
ambivalent	－0.02	0.05	0.05	0.11	0.11

＊p.<05

子構造が確認されたので、ポジティブで良い印象の場合に高くなるように合計得点を算出した。S群とNS群別に各尺度及び合計得点の平均プロフィールを図１に示した。合計得点において群間に有意差が認められ（t=2.11, df=89,p<.05)、S群の方がNS群よりも高い得点を示した。また、各尺度の中では、S群の方がより「安定した」、「良い」、「やわらかい」印象を与えていた。

一方、家族の雰囲気評定（親子関係、夫婦関係、きょうだい関係、全体）においては、いずれも群間に有意差は認められなかった。また全体分析においても、群間差は見られなかった。

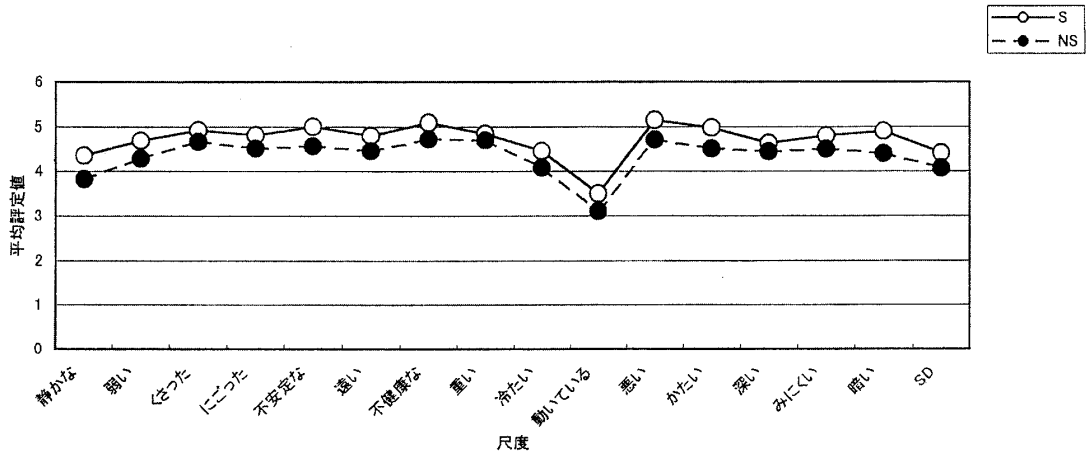

図１　家族印象評定平均値におけるIWMの安定(Ｓ)群と不安定(NS)群の比較

4．IWMと家族画特徴との相関分析

IWM尺度得点と家族描画印象評定値との相関を求めたところ（表6）、回避得点とSD法合計得点（.21）、親子関係（.20）、きょうだい関係（.22）、全体的雰囲気（.23）において低い正の相関がみとめられた。

5．円環イメージ画の幼い頃と現在の比較

円環イメージ画の関係（内包・内接・交錯・外接・分離）については、頻度が少ないカテゴリーが認められたので、内包と内接、交錯と外接、その他と無しを合計したものを用いてχ2 検定を行い、幼い頃と現在を比較した（表7-1,N＝135）。その結果、内包・内接から交錯・分離へという変化が認められた（χ2＝15.33,df=2,p<.01）。また、位置については中、横、その他の3カテゴリーに分け同様の検定を行ったところ、表7-2に示すように中から横へという変化が有意であった（χ2＝20.09,df=2,p<.01）。さらに、大きさについては母親＞自分から母親＝自分へ（χ2＝38.02,df=2,p<.01）という変化が認められた（表7-3）。なおコメントについては有意な傾向は認められなかった。

6．IWMと円環イメージ画の関連

IWMの安定型と不安定型の比較についても、上述のようにカテゴリーを再編してχ2検定を行った。幼い頃では、安定型に交錯・外接が多く分離が少ない傾向が見られた（表8-1）。また現在でも、安定型の方が交錯・外接が多く、分離が少ない傾向が認められた（表9-1）。また大きさにおいては、不安定型に母親＜自分とその他のカテゴリーが多い傾向が認められた（表9-3）。しかし、コメントについては顕著な群間差が認められなかった。

表7-1　円環母子イメージ画（関係）の幼児期と現在の比較

	内包	内接	交錯	外接	分離	その他	無
幼児期	26	5	34	14	36	8	5
現在	3	3	52	9	48	7	6

表7-2　円環母子イメージ画（位置）の幼児期と現在の比較

	上	横	斜め下	下	中	その他
幼児期	2	71	8	3	38	6
現在	3	104	2	1	14	4

表7-3　円環母子イメージ画（大きさ）の幼児期と現在の比較

	母＞自分	母＝自分	母＜自分	その他
幼児期	107	9	3	4
現在	64	48	7	3

表7-4　円環母子イメージ画（コメント）の幼児期と現在の比較

	ポジティブ	ニュートラル	ネガティブ	コメント無し	詳細記述
幼児期	28	33	18	42	7
現在	39	34	10	36	9

表8-1　安定愛着群と不安定愛着群における幼児期の円環母子イメージ画(関係)

	内包	内接	交錯	外接	分離	その他	無
安定型	9	1	12	6	8	2	1
不安定型	8	3	11	3	19	4	3

表8-2　安定愛着群と不安定愛着群における幼児期の円環母子イメージ画(位置)

	上	横	斜め下	下	中	その他	無
安定型	1	23	1	1	2	10	1
不安定型	0	26	4	2	4	12	3

表8-3　安定愛着群と不安定愛着群における幼児期の円環母子イメージ画(大きさ)

	母＞自分	母＝自分	母＜自分	その他	無
安定型	32	2	2	2	1
不安定型	42	3	1	2	3

表8-4　安定愛着群と不安定愛着群における幼児期の円環母子イメージ画(コメント)

	ポジティブ	ニュートラル	ネガティブ	コメント無し	詳細記述
安定型	9	14	3	11	2
不安定型	8	11	9	20	3

表9-1　安定愛着群と不安定愛着群における現在の円環母子イメージ画(関係)

	内包	内接	交錯	外接	分離	その他	無
安定型	1	0	21	3	12	1	1
不安定型	0	2	17	1	25	3	3

表9-2　安定愛着群と不安定愛着群における現在の円環母子イメージ画(位置)

	上	横	斜め下	下	中	その他	無
安定型	0	35	0	1	1	2	1
不安定型	1	40	2	0	2	6	3

表9-3　安定愛着群と不安定愛着群における現在の円環母子イメージ画(大きさ)

	母＞自分	母＝自分	母＜自分	その他	無
安定型	20	17	0	2	1
不安定型	23	18	6	4	3

表9-4　安定愛着群と不安定愛着群における現在の円環母子イメージ画(コメント)

	ポジティブ	ニュートラル	ネガティブ	コメント無し	詳細記述
安定型	11	14	2	9	3
不安定型	14	11	6	16	4

考　察

IWMスタイルを山岸（1997）と同様の方法で分類した結果、アンビバレント型が多く、安定型が少なく、回避型は見られなかった。山岸（1997）は、20代後半の看護専門短期大学卒業の女性31名を対象として、安定型、回避型、アンビバレント型それぞれ6、2、6名を見いだしており、本研究ではアンビバレント型が多いという偏りが認められた。今回の調査対象は、心理学・社会学等を専攻する学生であり、こうしたサンプリング集団の特徴を反映しているのかもしれない。

典型的な安定型・回避型が多くなかったことから、安定因子得点が正である安定型、それ以外を不安定型として、家族描画の特徴、描画様式を比較した。その結果、安定型は不安定型と比べて家族成員が何らかの動作を行っている場面を描くことが多く、また人物像が大きいことが認められた。これらの結果は、Fury et al.(1997)が用いた全体評定尺度のうち、活力／創造力の項目に対応しており、愛着安定性の指標として一致したものとなった。

また、家族描画の印象とIWM各因子得点の相関係数を求めたところ、回避得点とSD法合計得点、家族雰囲気得点とに低い正の相関が認められた。これは、家族関連語に対する連想反応数とに正の相関を認めた宮本（1998）の報告と一致しており、回避型の対人情報処理の抑圧方略を反映していると考えられる。すなわち回避傾向が強い者は、家族関連語に対する連想と同様、家族表象についても情動的側面を抑制した、こだわりのない描画を表現したのではないだろうか。

一方、円環母子関係イメージ画における関係・位置・大きさ・コメントの各カテゴリー度数について、幼い頃と現在を比較したところ、関係においては内包・内接から交錯・分離へ、位置については中から横へ、大きさについては母親＞自分から母親＝自分へという変化が認められた。幼い頃から青年期への心理的分離、独立が進むことを反映していると考えられる（落合・佐藤,1996)。

しかし、こうした発達的変化にも関わらず、IWMの安定型と不安定型の比較から、幼い頃にも現在にも、安定型の方が交錯・外接が多く、分離が少ない傾向が認められた。これらの結果は、物理的身体的な分離が進む一方で、安定型は心理的な関わりが維持されており、不安定型は分離関係のイメージが多いことを示している。しかし、コメントについては顕著な群間差が認められなかった。以上の結果は間接的ではあるが、母子関係の無意識的な表象にIWMスタイルが反映されていることを示唆している。

IWMと家族描画・円環イメージ画の関連を分析した結果から、IWMスタイルは対人情報処理の抑制の有無を反映するという仮説の一部は支持された。すなわち、回避型は抑圧方略をとるだろうという愛着の二次的方略の仮説は支持されたといえる。

しかし、家族画の全体評価には明確な関連が認められなかった。心理臨床事態で家族画を拒否したり形式的に粗雑に描くクライエントの場合、クライエントが家族へ敵意を抱いているからなのか、心理臨床家を含めた心理テストへの不満から防衛的になっているのかを区別することが必要であるという（高橋,1987)。本研究においても、白紙の提出が3例見られ、家系図型や図式的説明図がみとめられた。集団的な一斉調査でなく、個別検査によってラポールを確立した事態での資料収集が求められよう。

最後に、IWMに関連する情報処理事態の妥当性が問題となるだろう。これまで我々は家族関連刺激を用いてきたが、ポジティブなもののほうがネガティブなものよりも多く含まれていたと思われる。Mikulincer & Orbach（1995）は、幼い頃の個人的な怒り、不安、悲しみ、幸福経験の想起を求めるという方法によって、感情制御及び抑制的防御とIWMスタイルとの関連を検討している。その結果、アンビバレント型はネガティブな感

情を抑制できず、ネガティブな記憶へのアクセスが容易であること、回避型は防御が堅く、ネガティブな記憶へのアクセスビリティが低いことを見いだした。今後、こうした認知心理学的な手法を援用した厳密な実験事態で、特にネガティブな家族に関連した情報を用い、IWMと対人情報処理の機構について研究を進める必要があると思われる。

[註]

(1) 本研究の一部は、第43回日本教育心理学会（2001年9月愛知教育大学）で発表された。

(2) 東海女子大学大学院文学研究科人間文化専攻修士課程2年

引用文献

Ainsworth,M.D.S.,Blehar,M.C.,Waters,E., & Wall,S. 1978 *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation.* Hillsdale, NJ: Erbaum.

Ainsworth,M.D.S., & Eichberg,C.G. 1991 Effects of infant-mother attachment of mother's unresolved loss of attachment figure, or other traumatic experience. In C.M.Parkes, J.Stevenson-Hinde, & P.Marris (Eds.), *Attach-ment across the life cycle*(pp.160-183). London and NewYork: Tavistock/Routledge.

Bowlby,J. 1976 黒田実郎・大羽蓁・岡田洋子（訳）母子関係の理論Ⅰ愛着行動．岩崎学術出版 (Bowlby,J. 1969 *Attachment and Loss, vol.1: Attachment.* London: The Hogarth Press)

Bowlby,J. 1977 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子（訳）母子関係の理論Ⅱ分離不安、岩崎学術出版 (Bowlby,J. 1973 *Attachment and Loss, vol.2: Separation.* London: The Hogarth Press)

Bowlby,J. 1981 黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子（訳）母子関係の理論Ⅲ愛情喪失、岩崎学術出版 (Bowlby,J. 1980 *Attachment and Loss, vol.3: Loss.* London: The Hogarth Press)

Bretherton,I. 1995 A communication perspective on attachment relation-ships and internal working models. In E.Waters, B.E.Vaughn, G.Posada, & Kondo-Ikemura (Eds.), *Caregiving, cultural, and cognitive perspectives on secure-base behavior and working models: New growingpoints of attachment thery and research. Monographs of the Society for Research in Child Dvelopment,* **60**, 310-329.

Cassidy.J. 1988 Child-mother attachment and the self in six-years olds. *Child Development,* **59**, 121-134.

遠藤利彦 1992 愛着と表象―愛着研究の動向：内的作業モデル概念とそれをめぐる実証的研究の概観 心理学評論, **35**, 201-233.

Feeney,J.,& Noller,P. 1996 *Adult Attach-ment.* London: Sage Publications

Fury,G.,Carlson,E.A.,& Sroufe,L.A. 1997 Children's Representaions of Attachment Relationships in Family Drawings. *Child Development,* **68**, 1154-1164.

Hazan,C.,& Shaver,P. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology,* **52**, 511-524.

Kaplan,N., & Main,M. 1986 *Instruction for the classification of children's family drawings in terms of representation of attachment.* Berkeley: University of California. (cited by Fury et al. 1997)

Kobak,R.R.,& Aceery,A. 1988 Attachment in late adolescence: Working models, Affect regulation and representations of self and others. *Child Development,* **59**, 135-146.

Main,M. 1996 Introduction to the special section on attachment and Psychopathology: 2 . Overview of the field of attachment. *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* **64**, 237-243.

Main,M.,Kaplan,N., & Cassidy,J. 1985 Security in infancy, childfood, and adulthood: A move to the level of representation. In Bretherton & E.Waters (Eds.), *Growing points in attachment theory and research* (pp.233-256). *Monographs of the Society for Research in Child Development,* **50** (1-2, Serial No.209).

松尾和美・小川俊樹 1998 円環イメージ画にあらわれる幼児期の母子関係(1) 日本心理学会第62回大会発表論文集,278.

松尾和美・小川俊樹 1999 円環イメージ画にあらわれる幼児期の母子関係(2) ―「幼い時と」と「現在」の母子関係をあらわす二枚のイメージ画の比較から― 日本心理学会第63回大会発表論文集,278.

宮本邦雄 1998 家族関連語に対する連想反応と内的作業モデル 東海女子大学紀要,**18**,39-49.

宮本邦雄 1999 家族関連語に対する連想反応と内的作業モデル 日本心理学会第63回大会発表論文集, 300.

落合良行・佐藤有耕　1996　親子関係の変化から見た心理的離乳への過程の分析　教育心理学研究、**44**, 11-22.

小川俊樹・松尾和美　1998　現代の中学生のもつ母子間系イメージの検討　安田生命社会事業団研究助成論文集,**35**,80-89.

佐藤　徳　1998　内的作業モデルと防衛的情報処理　心理学評論、**41**,30-56.

高橋雅春　1987　家族画診断の基礎　家族画研究会（編）臨床描画研究Ⅱ　金剛出版、6-17.

詫摩武俊・戸田弘二　1988　愛着理論からみた青年の対人態度―成人版愛着スタイル　尺度作成の試み―東京都立大学人文学報、**196**, 1-16.

山岸明子　1997　青年後期から成人期初期の内的作業モデル：縦断的研究．発達心理学研究、**8**, 206-217.